

# 市民の応援で広がる新しい学習支援モデル

— 『特定非営利活動法人 ボランティアチャー』 —

ボランティアチャーは、家庭の金銭的な事情などにより、適正な教育投資を受けられないことで進学や就労に差がつかってしまうといった「負の連鎖」を解消するため、無償の学習支援活動等を行っている団体です。理事長と大学生ボランティアの奥村光さんにお話をうかがいました。

## 子どもの貧困

厚生労働省の国民生活基礎調査によると、2012年時点で、全国の平均所得の半分を下回る世帯で暮らす18歳未満の子どもの割合は、過去最悪の16.3%。6人に1人の子どもが貧困に直面していることになる。愛知県の小・中学生だけで考えると、その数は10万人を超える。政府は2014年8月に、子どもの貧困対策の大綱を閣議決定し、貧困が世代を超えて連鎖することを断ち切るため、教育支援、生活支援、保護者への就労支援、経済的支援等を重点施策として打ち出した。また、塾で使えるような「学校外教育バウチャー券」の配布、行政からの委託を受け、居場所づくりとセットで行う学習支援など、さまざまな形の支援が行われている。

「しかし、愛知県内だけでも10万人以上いる子どもたちが、それだけで救えるのか。予算的な限界もあり、可能性としては低いのではないのでしょうか。だから、ボランティアチャーは市民が応援してくれるようなスタイルで活動を広げていきたい」と理事長は言う。

活動を応援し、参加してくれる人を増やすために

ボランティアチャーでは、学習支援の対象を生活保護の受給世帯やひとり親世帯といった家庭に限定しているわけではなく、一般の家庭も受講することができる。教育費は一般家庭にとっても負担は大きく、

また、活動を広めていくためには、何よりも多くの方に利用してもらうことが大切だと考えるからだ。一般の家庭には会費を払ってもらい、それをもとに支援対象の家庭をサポートするという形をとっている。活動開始から一年半で約2000時間、のべ1200人を対象に学習支援を行ってきた。その半分は一般家庭で、残りが生活保護家庭やひとり親家庭、外国籍の家庭だ。最近、外国にルーツを持つ子どもの保護者からの問い合わせが増えているそうだ。

応援者を増やし、さらに大きな広がりを持つ活動にしていきたいという思いから、チラシのポスティングも行っている。現在、ポスティング活動は名古屋を中心に、一宮・春日井・豊田・刈谷などでも行っている。認知度を上げるため、最近は豊田の駅前などで街頭宣伝にも取り組んでいる。手にとってもらいやすく、印象に残るような広報物を作り、配布している。

また、この1年間は学生ボランティアを主体にして地域への浸透を図ってきたそうだ。活動を広げ、地域に根付かせるためには、それぞれの地域で主体的に活動する人たちが集まり、ボランティアチャーの「支部」のような組織ができるのが一番いいという思いがあるからだ。今開催している「理科実験教室ボララボ」のようなイベントも、将来的には活動主体が地域の組織に移っていくことを期待している。それぞれの「支部」がイベントをやりたいと思ったときに、ボランティアチャー



ボララボの事前実験もすっかりと

「本部」から学生ボランティアが参加し、イベントを盛り上げるという形にしていきたいとのこと。「今までにない活動モデルだと思います。将来的には、それぞれの地域に『自分たちの地域は自分たちでみよう』という思いを持って活動する人たちがいて、それを応援するのがボランティアチャーの役割だと思います」と理事長は言う。学習支援活動やさまざまな広報活動を通じて、自分たちの地域のために動く人たちを掘り起こし、地域の連帯や絆を取り戻していきたいという思いで活動を続けている。

活動するボランティア自身も成長できるように

ボランティアチャーでは1対1の家庭教師スタイルで教えるため、「この子は自分の担当だ」という自覚や責任感が生まれ、ボランティアは活動に対してより熱心に主体的に関わるようになる。時間をかけて予習をしたり、担当する子ども専用のオリジナルプリントを作るなど、自分なりの工夫も生まれる。そして活動を続けるうちに、子どもや保護者との人間関係ができ、子どもの成績も伸び、それが子どもやボランティアのモチベーションに繋がるという、いい循環が生まれる。

またSNSを使って、保護者とボランティア、事務局が情報を共有しているそうだ。それは、「今日はページをやりました」というような単なる報告のためではなく、ボランティアと保護者が話し合う場として使ってもらうためものだ。学習指導経験者も情報を共有し、自身の経験を活かし、ボランティアにアドバイスができるようにと考えられている。

現在、学生ボランティアのリーダーとして活動している奥村さんは、ボラみみのホームページでボランティアチャーに出会った。活動を始めてから一年半、勉強に対する意識が変わったそうだ。また人前で話す機会も増え、自分から積極的に話しかけることができるようになった。担当する子どもへの対応や、ボララボなどの企画・運営について、いろいろと迷い悩むことも多いが、その過程が自分の成長につ

ながっていると実感しているそうだ。

子どもと真剣に向き合うのは大変なことも多い。だからこそやりがいのある活動であり、その活動をサポートするために事務局がある。活動者自身が人とつながる喜びや自分の成長を感じられるようなバックアップ体制があることで、ボランティアの輪が広がっている。

理事長は、「ボランティアチャーでの活動を通して、困った人がいたら手を差し伸べようと自然に思える人になってもらえればいい。そういふ人が増えること自体が、社会がよくなっていく要因だと思います」と、ボランティアに対する期待を話してくださった。さらに、「学習支援に行き、『困っている人たちの手助けをしよう』というだけで終わってしまうと活動は広がらない。自分だけでは1日1人しか対応できないし、毎日ボランティアができるわけではない。だから多くの人が必要。ボランティアには、自分が学習支援をしっかりとやることだけでなく、一緒に活動する人を増やそうという意識を強く持ってほしい」と言う。新しい学習支援モデルを作り、地域へと広げていくため、ボランティアチャーの挑戦は続く。



お話をうかがった奥村さん

## Information

特定非営利活動法人 ボランティアチャー  
 名古屋市西区比良4-303-205  
 TEL: 052-508-8488( 10:00 ~ 17:00 )  
 E-mail: volun-teacher@orchid.plala.or.jp  
 URL: http://volunteacher.greenwebs.net/



ボララボの企画は学生ボランティアが中心となって考えている



ポスティングは朝7時頃から行うこと